ラオスの子どもたち

インタヴォン・チャンタソン

アジア、アフリカというと、皆様は何を連想するだろう。返ってくる返事は、きっと、人口が多くて、きたなくて、飢餓がひどく、治安が悪い、未開なところ、などというあたりだろう。皆様だけではない。日本に長く住む私でも、もしアジアに行ったことがなければ、新聞やテレビなどで報道された情報だけ見ていれば、片よったアジアのイメージしか持っていなかったかも知れない。

ところが、現実には、いろいろなところ、町や村々に旅してみると、本当にさまざまな文化、人種、生活などが生き生きと豊かに営まれているのだ。

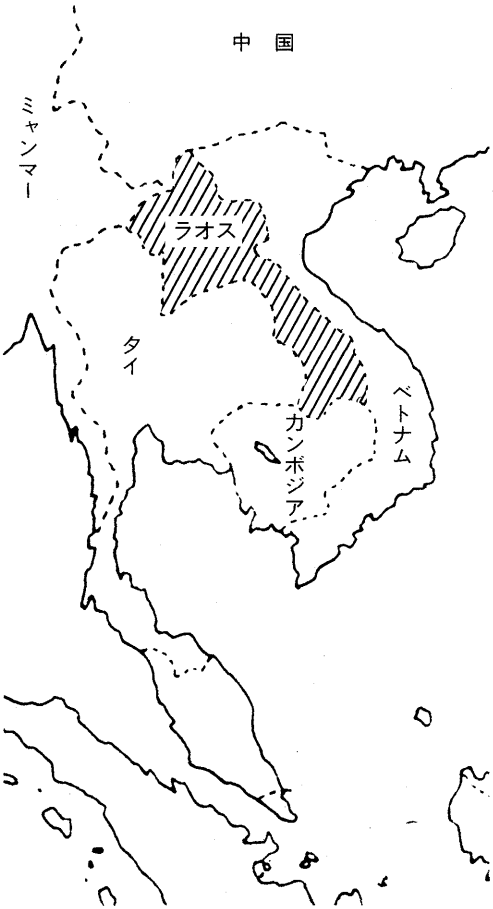
二十年も日本に住んでいると、体や感覚の半分が日本化され、アジアに対して、だんだんと日本人と同じ見方をするようになってくる。幸か不幸か知らないが、自分の意志と関係なく、知らず知らず少しずつ、そうなってくる自分が感じられる。

そういうわけで、自分のアジア的な感覚、アイデ

ンティティを確認し、取り戻す作業として、毎年二、三回、自分の心のふるさとであるアジア、特に、自分の生まれ育った国のラオスに帰る。

毎年何回か帰っても、ラオスのことをぜんぶ知ってはいないということを思い知らされる。しかし、現在、「ラオスの子どもに絵本を送る会」と「ラオスの女性とともに仕事を作る会」というボランティア活動をやっている関係で、自然に子どものことや女性のことに目がいってしまう。

ラオスと言っても、どこにあるか、どういう国なのかなどについて、なかなか知られていない。これからアジアをもっと知るために、ラオスの国のことやラオスの人々、子どもたちの生活についてのべてみたいと思う。



▲五つの国に囲まれた山合いの国ラオス

ラオスは、東南アジアの中央にあり、北に中国、東にベトナム、南にカンボジア、西にタイとミャンマーに囲まれた、日本の本州と同じぐらいの山がちな小さな国である。ラオスの人口は四二〇万人しかいないが、総人口のうち、ラオ族、モン族、黒タイ族、赤タイ族など七〇ぐらいの民族によって、構成されている。それぞれ、独特の文化、言語、服装などを持っている。国土のほとんどが山や森林で覆われ、豊かな自然を提供してくれると同時に、それぞれの地域を隔離し、行き来する道路もないまま、基礎的な教育である小学校の五年間でさえも普及されていない。そうした理由から、同じ国にいても、言葉が通じないことはめずらしくない。

◀少数民族、モン族の娘

ラオスの国民の99%が小乗仏教を信仰している。そして、国民の95%は農業を営んで自給自足の生活を行っている。専業農家の他に、国家公務員として働いている人たちも、農業や他のサイドビジネスをやらなければ、五～六人家族は食べていけない。また農村や町に住む人々の中には、夫や親の収入を手伝うために市場で物売りする妻や、学校に通わない子どもたちが、いっぱいいる。

家族の経済問題に加え、学校、教師、教材が不足しているため、子どもの勉学する権利がうばわれて

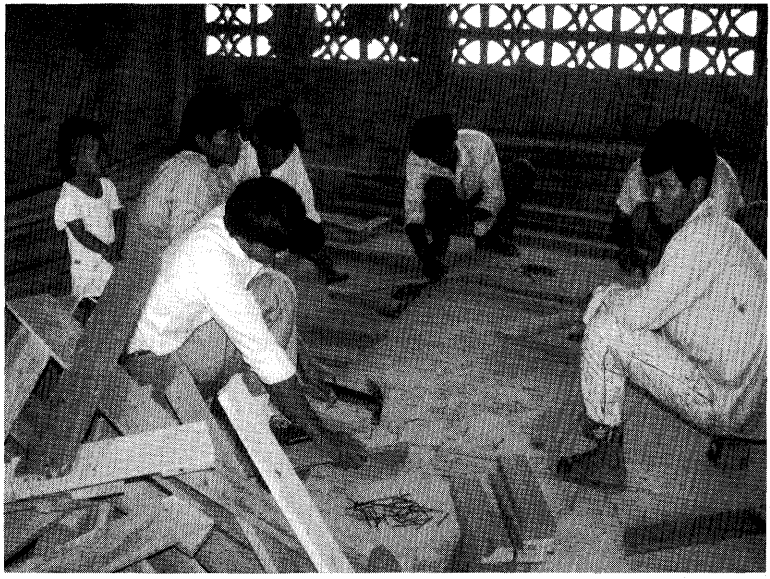
しまう。

一九九〇年から二〇〇〇年まで、全世界から、非識字者（文字の読めない人）を無くそうと、UNESCOが音頭を取って、各国の政府に働きかけた。

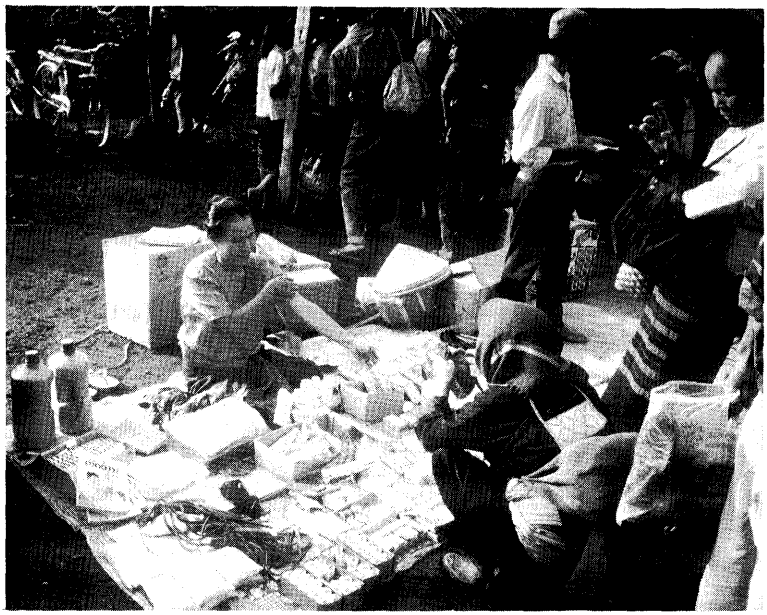
政策上、どの国も立派な計画を企てるが、それを実現させるのに必要な教育環境を整備する膨大な財政や平和がない国が多く、残りの六年間のうちに、とうてい、目標達成は望めそうにないと思う。

たとえば、ラオスのことを例にとってもよく判っていただけると思う。

ラオス政府の政策として、教育を他の事業より、一歩先にと、一九七五年の社会主義革命以後、より多くの子どもに就学できるように、六年間だった小学校教育を五年にへらした。それまで小学校のない村に小学校建設を村の責任とし、校舎ができる村には、政府が教員を派遣してくれることになっている。ところが、農村の収入源のない村では、学校を造ることは、村民にとっては、重荷である。しか



▶村人が自分たちで小学校を造っているところ



◀ベトナム国境近くの市場で。教科書が売られている

し、何とかして、ほったて小屋のような学校を皆で造ったものの、派遣されてきた教師の給料は、毎月県から支払われないため、教師は自給自足となり、一日中、学校で教えていられないか、学校の先生を止めてしまう人も多い。余裕のある村では、村民が自分たちで、先生の給料の代わりに、米や野菜などを提供する。しかし、学校の設備、教材などの不足や給料の不払いの他に、もっと深刻なのは、生活条件の悪い片田舎や山岳地域の少数民族のところに派遣された時に、生活習慣の違い、言語の問題で、教員が行きたがらないため、先生不足になり、一人の先生が二～三教室を同時に見ることもある。

幸運にも、学校もあって、教員もいるが、子どもたちが経済的な理由や、家事、畑仕事などの手伝いのため、学校に来られなかったり、二、三年生で中退したりする子どもも多い。それだけではないが、学校教育の内容が、直接生活に役に立たないため、親や子どもが魅力を感じないし、必要だと思わな

▶お兄ちゃんが妹を保育園に迎えに行く

い。それも子どもが学校に定着しない一つの理由でもある。ある時、ヴィエンチャン市内の貧しい人々の住んでいる地域の学校を見学に行った時に、二十分休みの間に何人かの子どもが、鉄線の塀をのりこえて逃げたところを見かけた。そういえば、どの学校も立派な塀をほしがり、子どもが逃げないように門番のいる学校もある。学校の内容が面白ければ、せっかく来られる学校から逃げるはずがないと思うが、ラオスの教師はそう思っていないようだ。彼らは考える余裕がない。なぜならば、自分たちの生活のことでせいいっぱいである。市内の学校の先生でも、授業が終わると同時に、休みの間は学校内にある店で物売りおばさんになり、授業が始まると、また教員の顔にもどるのである。ある女の先生は、小さい子どもを保育園に預けるお金がないため、子守りをしながら授業をやっている。これらの風景は、ラオスだけではなく、開発途上国では、よく見られる風景だ。

田舎に行けば行くほど、子どもたちには、自分たちの意志だけでは、どうにもならない問題が多すぎて、なかなか簡単に解決できそうにない。

ところが、子どもが多くて、毎日食べることだけで頭がいっぱいで、子どもの教育に無関心の田舎の親と違って、都市にいる人は、数少ない子どもの教育に熱心で、より良くて高い教育を受けさせようと、小学校レベルから、英語塾、補習塾などに通わせ、小学校五年が終わると、中学校、高校に進学させ、大学まで行く人も増えてきた。

一九八六年に、社会主義国のラオスに自由経済が導入されてから、事業に成功し、生活に余裕のある人は、少しではあるが、増えている。彼らは、日本の親と同じように、より良い教育を期待し、少しでも長く教えてくれる私立学校に通わせるようになった。私立学校によっては、一か月分の国家公務員の給料よりずっと高い授業料の学校もある。また、町ではタイや他の外国から輸入されたものがあふれて

◀国でたった一軒の国営書店。本棚には本があまりない

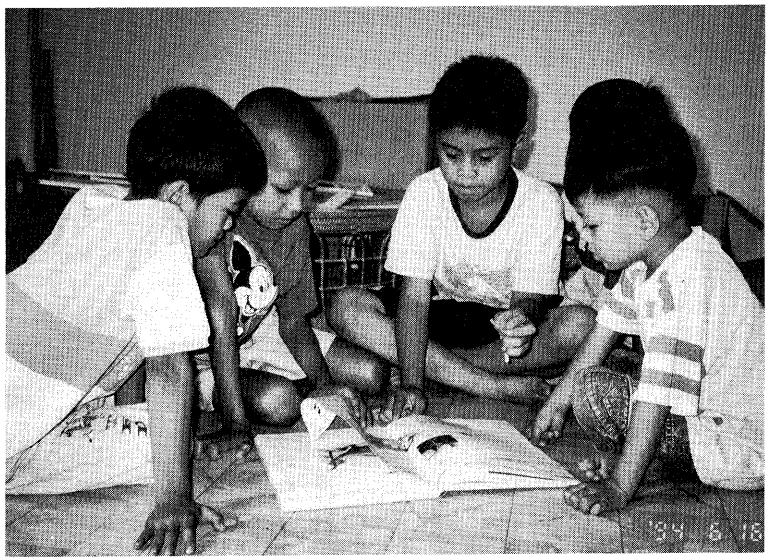
いる。それに加えて、タイTVの電波にのって、日本の商品のCMは、日本で発表されるのと同時にラオスでも情報をキャッチすることができる。ほしい物を買うことのできる人にとっては便利でいいが、貧しい人々にとってはすごい情報の暴力でしかないと思う。

お金のある人が、日本の子どもが持っている物と同じ物、たとえばテレビゲームや高級なマウンテンバイクなどを買って与えることによって、それまで、皆平等で手作りのおもちゃで遊んでいたのが、今は、高価なおもちゃを持つ子を頂点に、子どものピラミッド型の付き合いができてしまう。

自由経済のかげで、貧富の差が少しずつ広がっている。毎日のように、日本や世界の新製品の情報が、電波から流れてきて、大人や子どもの欲望を刺激し、永遠に満たされない欲望が人々を失望感に落とし入れる。その欲望を満たすために一生懸命働く人もいれば、犯罪を起こす人もいる。こういう環境の中に子どもたちが置かれているため、いつ犯罪を起こすかわからないという危険性にさらされている。

このアンバランスな社会体制の中で、子どもの健全な成長を確保するため、社会全体に、もっと広く言えば、世界全体に、子ども一人ひとりのあたりまえの権利としての教育権、生存権を守らなければならないと思う。

そういう目的のため、微力ではあるが、少しでも子どもの教育環境の改善になればと、「ラオスの子どもに絵本を送る会」は、不足している教科書の代わりに、少しでも文字にふれて文字を忘れさせないために、絵本やラオスの昔話の本を作って、農村の小学校や中学校に無料配付している。そのかたわら、町の子どもたちの興味を、少しでも物質からとおざけ、精神的、文化的価値感に興味を持ってくれるように、ラオスの文化庁に協力して、町の中心地に、子どもが、本を読んだり、絵をかいたり、図工



▶「絵本を送る会」ラオス事務所の図書室で

を楽しんだり、音楽に親しんだりしてもらうために、子ども文化センター（日本でいうと児童館のようなもの）を運営している。

この活動を通して、子どもたちが、自分たちが自分の言葉で自分たちの主張を表せるようになり、自分たちの文化を形成し、自分たちで自立していく力を身に付けてもらえたら、これ以上のしあわせはないと思う。

（ラオスの子どもに絵本を送る会代表
ラオスの女性とともに仕事を作る会代表
東京都国際理解教育派遣講師
外務省語学研修所非常勤講師）

＊現在「絵本を送る会」では、ラオスの子ども用の初の絵解き辞書を作っており、小・中学校に無料配布する予定で募金をつのっています。